

別役実

戯曲集



マッチ売りの少女象



マツチ売りの少女 象

別役実戯曲集

別 役 実
めっ やく んのち

1937年 満州に生まれる

1960年 早稲田大学第一政経学部中退

1962年 自由舞台（後に早稲田小劇場）結成『象』上演

1968年 『マッチ売りの少女』『赤い鳥の居る風景』で
第13回《新劇》岸田戯曲賞を受賞

著 書 『不思議の国のアリス』（三一書房）

『そよそよ族の叛乱』（三一書房）

『移動』（新潮社）

『淋しいおさかな』（三一書房）

『戒厳令—伝説・北一輝—』（角川書店）他

現住所 東京都渋谷区広尾 2—6—7

別役 実戯曲集 マッチ売りの少女／象

1969年 7 月15日 第 1 版第 1 刷発行

1977年 7 月15日 第 1 版第11刷発行

著 者 別役 実 ©1969年

発行者 竹村 一

発行所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台 2 の 9

電話東京(291)3131～5番

振替東京9-84160番

郵便番号101

印刷所 誠和印刷株式会社

製本所 山本製本所

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

目次

マッチ売りの少女	3
赤い鳥の居る風景	35
カンガル―	87
墮天使	147
或る別な話	183
象	199
それからその次へ（あとがきにかえて）	257

マッチ売りの少女

登場人物

女

その弟

初老の男

その妻

一幕

舞台中央に古風なテーブル、三脚の椅子。やや上手に小さなサブテーブル、一脚の椅子がある。

これは、いわば古風な芝居である。従つて古風に、いささかメランコリックに始まらなければならぬ。

場内の明りが、いつの間にか暗くなる。どこからともなく、流行遅れの流行歌のような哀しい淋しいメロディーが、かすれかすれ、聞こえてくる。と、思いがけなく、すぐ耳の近くで、かわいた、低い女の声がささやくのである。それはどうやら、次のように聞こえる。

女の声

それは一年の一番おしまい、の夜、つまり大晦日の晩のことでした。大変、寒い夜でした。あたりはもうすっかり暗くなって、しかも雪が降っていました。だあれもない暗い街を、一人の貧しい少女がトボトボと歩いていました。帽子もかぶらず、その上裸足でした。さっきまでは、死んだお母さんの木グツをはいていたのですが、それはその子には大きすぎました。二台の馬車が大急ぎで通りすぎるのをよけようとして、二つが二つとも、失くしてしまつたのです。少女のおさない足は、紫色にはれあがつて、固く凍りついた雪

の上を、ひとあし、ひとあし、歩いておりました。エプロンのポケットには、マッチをいっぱいもっておりました。手にもひとたば、持つておりました。その子はマッチを売つていたのです。でも、今日は一日中、誰も買つてはくれませんでした。だれひとり、わずか一シリングのお金も、めぐんではくれなかつたのです……。

下手から、初老の男とその妻が「夜のお茶の道具」を持つて現われる。道具をテーブルに規則正しく並べ始める。この家には、道具の並べ方について厳重な法則があるかのようである。妻の方は時々間違えるが、男がそれを直してやつたりする。色々な物が、お盆の上から、懷から、ポケットの中から取りだされて並べられる。ティーポット、カップ、スプーン、シュガーポット、ミルクポット、ジャムのビン、バター、ビスケット、種々の香料のビン、木の美、しなびた小さな果物、その他小さな植物達、同じく動物達、細かいものがビッシリと並べつくされる。

その間、二人は、次のようなことをブツブツとつぶやいてゐる。

男

いいかね、食卓のつくり方と云うのは微妙でね、ちよつとした並べ方ひとつで、しなびたレモンにもツヤ

が出る……。

妻 おむかいではね、におい消しの次に粉ホーレン草を置くんですって……。

男 ふん、何の洒落だい？

妻 そう、私もそう云ってやりましたの。一体、何の洒落ですって……。そうしたら、云うことがいいじゃありませんか、うちにはうちのユキカタがありますって……。

男 ユキカタがね、そうさ。しかし、いいかね、モノにはドウリがある。ユキカタにはコンキョがなくてはならない。

妻 そうです。私もそう云いましたの。コンキョがなくては……。

男 おい、そいつは何だい？

妻 にんにくよ。

男 にんにくは朝だよ。夜のお茶ににんにくなんて聞いたことがない。

妻 でもさつき夕焼けを見たわ。あなたいつもおっしゃるじゃありませんか、夕焼けのにんにくって……。

男 朝焼けのにんにくだよ。夕焼けのタマネギさ。

妻 そうだったかしら、じゃ、タマネギね。

男 でも、あれはやめよう。

妻 何故？

男 匂うよ。

妻 匂いますよ、もちろん。でも一体匂わないものなんであるかしら。全ていいと云うわけにはいかないものよ。朝鮮人参は匂いませんけど虫がつかます。

男 知らなかったのかい、あの虫は神経痛にいい。

妻 タマネギを食べたいわ。あれをやると冷えませんか。一個で一晩もつんですって。二個で二晩。だから、三個で三晩よ。

男 冷え性にはコオロギの黒焼きだよ。何度云ったら分かるんだらう。一匹一晩。

妻 いません。今をいつだと思ってるんです。外は雪ですよ。

男 じゃ、こうするんだ。ゴマ油をいためる。それをさましておいて、塩をなめながら飲むんだ。ナメてノンで、ナメてノンで三回……テキメンだよ。

妻 それはお通じがなくなった時のやり方じゃなくて？

男 あれは大豆油さ。それにその時はナメてノンで四回……。お前はチットモ覚えないね。

妻 あら、それ、チーズかしら？

男 そうらしい。ゆうべはなかったんだがね。どこへ置こう？ 昔は、乾燥ナツメのそばによくチーズを置い

たものだが……。

妻 (手にして) いつのかしら、ずい分、古いわね。

男 うん、固くなっている。固くなったチーズと云うのがあったね。固くなったチーズは……。 (考える)

妻 歯形がついてるわ。あなたが噛りかけてやめたのね。

男 まさか、見せてごらん。私がそんな無作法をするわけがない。これはお前のだよ。

妻 私の歯はそんなにとんがっていません。

男 どうかね。しかし、こいつは猫のかもしれないね。

妻 そう、そう云えば、うちには昔、猫がいたわ。ペスだったかしら……？

男 ペスは犬だよ。クロがオームで、トビーが山羊さ、馬がタローだったから、猫は……やっぱりペスだったかな？

妻 猫がペスよ。クロがおおむ、トビーが山羊、馬がタロー、犬が……犬が……やっぱりペスかしら……。

上手より、女、現われる。

女 (静かに) こんにちは。

男 おや。

女 こんにちは。

妻 こんにちは。

女 夜のお茶ですの？

男 まあね、これでなんとか……。

妻 欠かせないんですよ、うちではね。昔っからなんです。

女 うちでもそうでしたわ、昔っから……。

男 どうでしょう、せつかくですから、ごいっしょに……？

女 ええ、ありがとうございます。

妻 そうなさい。お茶は夜に限らず、にぎやかな方が楽しいのよ。昔はうちもとてもにぎやかでした……。

男 さあ、どうぞ。

三人、それぞれ、椅子に着く。男は、それぞれのカップにお茶を注ぐ。

男 さて、お宅ではお茶の前に、つまり夜のお茶の前と云う意味ですが、おいのりをしますか？

女 さあ、私、よく覚えていないのです。

男 じゃ、やめましょう。実は、夜のお茶の前にお祈りをするのは正しくないのです。ほとんど無作法と云ってもいい。何故だか分かりますか？

女 いいえ。

男 神様のおぼしめしにないからです。聖書にこう云う言葉があります……。お前、覚えているかい？

妻 いいえ。

男 何でもよく忘れるのです。トシですからね。お砂糖はいくつにします？

女 ええ、でも、出来ましたら私、自分で……。

男 どうぞ、どうぞ、それが一番いい。人は全て自由でなくてはいけない。

妻 うちではね、夜のお茶の時間において頂いた方には必ず同席して頂くことになっていますの。あなたは何年ぶりの被害者。

男 そう、何年ぶりだったかね。それにしても、遅いお着きで……。どちらからいらっしやいました。

女 市役所から参りました。

妻 ああ、市役所ね、陰気なタテモノ……。そうでしょう、陰気じゃなくて？

女 陰気ですわ。

妻 陰気よ。

男 甘いものはどうです？

女 ありがとうございます。

男 油っこいものもありますよ。ところでそうだ、市役

所つていえば、あの男はどうしたろう？

妻 どの男です？

男 あの二階の窓際にすわってツバをとばす奴。

妻 ああ、あれね、もう死にましたわ、ずい分前のことです。

男 死んだかね、とうとう。みんなに迷惑をかけていました。多い時には日に十三回もやるのです。みんなあそこの所はよけて通ったものです。

妻 今はもう、誰もよけては通りません。今はその息子さんが坐っていますが、その子はとても礼儀正しいのです。でも、あなた、市役所から真直ぐこの私達の家へ来たんですの？

女 ええ。

男 ここへ？ つまり、この家を目指して？

女 そうです、ここへ……。

妻 そう。（やや啞然として）でもまあ、よく来て下さったわ。

男 そうだ。よく来て下さいましたなあ、近頃はないことですよ。

妻 で、市役所では何て云ってました、私達のことを……？

女 別に……。

男 善良な市民だと……？

女 ええ。

妻 モハンのな……？

女 ええ。

男 ムガイな……？

女 ええ。

妻 そうですとも、私共はこの上なく善良な、しかも模範的な市民です。

男 去年市長さんが、バルコニーに出て演説をなさった。そして最後にこう云われた。わが市には、実に三百六十二名の善良にして模範的な、しかも無害な市民がいる……。その最後の二名と云うのは、実は私達のことなのです。

妻 市民税は、沢山ではありませんけど、キチンキチンと納めておりますし、ゴミも沢山は出さない。お水もチョビットしか飲みません。

男 思想は穩健ですよ。私共はどちらかと云うと、進歩的保守派です。革新派の奴等は品が悪くてね、私共にはそれが耐えられない。奴等はあなた、口に手を当てないでアクビをします。本当ですよ。昔は、そんなことは、考えられもしなかった。

女 (しみじみと) ここは……あたたかいわ……。

妻 あたたかでしょう？ それに、上品です。私共はお金持ではありませんけど、必要以上につましくするのはきらいなのです。

男 ところで、つまり、我々の市役所は、あなたを私共の所へ、派遣したと云うわけですか？

女 いいえ。別に、そう云うわけでは……。

妻 むしろ、差し向けたと云うべきよ。

女 そうではないのです。私は、市役所で、こちらのことをうかがいました。そうして、お訪ねしたくなつて……お訪ねしたのです。

男 成程、分かりました。つまりあなたは、市役所でこのことを聞いた。そして、オタズネシタクナッタ。

妻 (感心して) あり得ることだわ。つまり、オタズネシタクナッテオタズネシタ、ので、オタズネシタクナインダケレドモオタズネシタのではないと云うことよ。

男 善意の訪問ですか？

女 何としてもお会いしたくて……。

妻 まあ、何て可愛いらしいことをおっしゃるのでしょう。もう一杯いかが……？ (お茶をすすめる)

女 ありがとうございます。

男 では、何なりと御質問なり、御注文なりおおせつけ

下さい。私共では、遠路はるばるおいで頂いた方の御期待にそむくようなことは決してしない方針なのです。何故我々が年老いてなお元氣であるのか。陽氣であるのか。ユーモアに満ちあふれているのか。何故我々は金持でもないのに必要以上につましくないのか。何故我々は進歩派でありながら保守派であるのか、何故我々は善良な市民であるのか。何故我々は正にワレワレであるのか。

妻 質問してごらん下さい。この人、いろんなことを、とてもよく答えてみせますわ、きつと……。

女 ありがとうございます。でも私、今はもう、ここにこうして坐らせていただいでるだけで充分なのです。

男 しかし、何か一つくらいありませんか、いわゆる質問と云う奴が……？ つまり、人間には常に三つくらいあるのですよ、質問がね……。

妻 私にも三つあります。

男 答の分かつている奴がね……。

女 本当に私……。ここに坐らせていただいて……その

上、あたたかいお茶までごちそうになって……。

妻 ああ、きつとこのかた、家庭的な雰囲氣に興味をおもちなよ。我家独特の家庭的な雰囲氣に……。

男 ははあ、わかります。この家庭テキキ雰囲氣と云うや

ツ、これが仲々クセモノでしてね……。知っておりま
すか、家庭テキキ雰囲氣に欠かすことの出来ないのは、
第一にネコです。第二にダンロイロリのたぐい、ウイ
スキードロクのたぐい、推理小説オトギバナシのた
ぐい、アミ棒と毛糸、もしくは破れた足袋手袋のたぐ
い、最後に老眼鏡……。ね。うちにもネコが居たので
すが最近見えなくなりましてね……。

妻 もしあなたが、前にちよつとお話しておいて下され
ば、お隣りから借りておきましたのに……。

女 どうぞ、おかまいなく。私、ただ、あたたかい所で、
やさしい人達と一緒に、静かにお茶をいただきましたか
つたのです。外はとても寒いのです。雪が降っています。
誰も居ないのです。

男 そうでしょう。今夜は降るのです。ずつと歩いてこ
られたのですか？

女 ええ、ずつと……。

妻 可哀そうに、おなかもおすきでしょうねえ、たくさ
ん召し上がれ。

男 私共は、不幸な人々に対しては限りなく親切にした
いと考えております。それが私共のユキカタなのです
……。

女の声 (どこからともなく) こうして今、この少女は

おなかをへらし、寒さにふるえながら歩いておりました。えりくびの所で美しくカールしている長い金髪のところへ、雪がヒラヒラと落ちかかりました。窓と云う窓から、あかりがもれてきて、ガチョウを焼く匂いが、おいしそうにプンプンしてきました。

それもその筈です。大晦日の晩ですもの。そのことだけを、少女は考えていました。家が二軒並んで、その間に小さなスキ間のある所がありました。そのスキに少女は体をちぢめてうずくまりました。小さな足を体の下にひっこめました。でもやっぱり、寒くなるばかりでした……。

妻 (小声で) あなた、やっぱりこのかた、私達に何かお話ししたいことがあるのよ。

男 そうですか? もしそうなら、遠慮なく話して下さいよ。それに……そうだ。何なら、私は座をはずしましょう。つまり、女は女同志と云うこともあるし……。

(立とうとする)

女 いいえ、どうぞ、ここにいらして下さい。いいのです。私は本当に、こうして、じっとしてたいのです。それだけでとても嬉しいのです。

妻 そうお、それならいいんですけれどもね、せっかく

来て頂いて、何もしてさしあげられなかった、なんてことになるとお気の毒ですし……。

男 そう、気のきかない奴だなんてね、思われるのも何だし……。

女 いいえ、本当に、そんな……。

妻 ああ、何か食べたいもの、ありません? 私、おのぞみでしたらウデをふるってもいいわ。

女 ありがとうございます。でも、今は……。

男 そう、それならね……。そうだよ、お前、この方はね、着いたばかりで、まだ、質問したり、何か注文したりする気になれないのだよ。そうしたもののなさ。ソツとしておいた方がいい。云うじゃないか、過剰な親切は何とかって……。何だったかな……。

妻 そうかもしれないね。どうぞゆっくりして下さい。私達はチットも急がないんです。

女 ええ。

男 気兼ねなさらないで……。

女 ええ。

妻 自分の家のつもりで……。

女 ええ。

男 ……。(何か云おうとするがやめる)

しゅんとする。

男 (思いついて) 外は……雪でしたか?

女 ……。(うなづく)

妻 (思いついて) コナ……ユキ?

女 え……。 (うなづく)

しゅんとする。

男 (再び思いついて) 疲れて……いらつしやいませんか?

女 いいえ。

男 いや、疲れていらつしやるに違いないよ。どうだろ

うお前、ちょっと横になって頂いたら……。

妻 そうね、そうなさいませよ。

女 いいえ、結構です。

男 しかし……。

女 本当に……。

妻 そうですか……。

何となく気まずい。

男 おい、いいことを思いついた。お前、この人のために、歌を歌ってやれよ。

妻 歌を? 歌えませんよ、わたしなんか。

男 ワタシナンカ……なんてね、ほら、ハニカンでますでしょう。ケンソンなんですよ。あなたの前ですけれどもね、こいつの歌はちゃんと聞けるのです。お前、いいじゃないか歌ってやりなさい。

妻 駄目ですよ。

男 駄目なことはいさ。このかたも聞きたいとおっしゃる。ね、そうでしょう、ちょっと聞いてみたくはありますせんか?

女 ええ……でも……。

男 それみる、さあ、恥ずかしがらずに歌ってみなさい。せっかくいらして下すったんだ。他はカラキシ駄目なんですがね、歌だけは聞けるのです。やや聞けるのですよ。いささか得意なんです。

妻 もう声が出ませんよ、この年になって。

男 コノトシニナッテ……ね、聞きましたか? 昨日云ったばかりなんですよ。この年になってこれだけ声が出るのは、いつもノドを大切にしてきたおかげだって……。

妻 内輪の話です、あれは……。

男 内輪も外輪もあるもんか。さあ、歌った歌った……。

あれがいい。あの……ユキガドンドン……（考えて）
ユキガドンドン……（考えて）ユキガドンドンフリツ
ミテ……。フリツンデ……。

女 （静かに）私は、マッチを売っておりました……。

妻 え？

女 私はマッチを売っていたのです。

妻 まあ、あなた。

男 何だい？

妻 この方、マッチを売ってるんですって。

男 マッチを……はあ、分かった。わかりましたよ。
トウトウ分かりました。そのマッチを買ってくれと云
うわけですね。もつと早く、そう云って下されば良か
ったのに……市役所へ行って住所録を調べて、最もマ
ッチの必要な家庭へ目ぼしをつけた。それがここだつ
た。そう云うわけだったんだよ。よろしい。わかりま
した。買いましょう。全部買い上げましょう。トラッ
ク一台あるか二台あるか分かりませんが、本当です、
ここで全部買いますよ。約束しましょう。

妻 あなた、でもマッチは買ったばかりです。クサルほ
どあります。もちろん、せっかくいらしたんだから、
いくつかは買いますよ。買いますとも。でもね、ああ

したもの、そんなに沢山あっても……。

女 いいえ、違うのです。私がマッチを売っていたのは
昔なんです。

男 ああ昔ね……。

妻 今は何をあきなっておられますの？ 何かうちにあ
つてもいいようなものがありましたら、いただくわ。
せっかくですもの。

男 そうだ。多少、高くてもね……。

女 今は別に……。

男 何も……？

女 ええ。

妻 （やや氣落ちして）そう……。

男 はあ、成程、あなたはつまり、思い出ばなしをな
さったわけですね、小さかった頃の……？

女 そうなのです。

妻 マッチを売ってらした……？

女 ええ。

男 いくつの時です？

女 七つでした……。

妻 大変でしたわねえ。

男 思い出しますでしょうねえ。

女 でも、本当は、つい最近まで、知らなかったのです。

男 知らなかった……？

女 もう、二十年になります。

妻 そりゃあ、そうね。

男 忘れていたのですか？

女 知らなかったのです。つい最近まで、私は何も知ら

なかったのです……。私は、結婚して子供を二人生み

ました。一人は男の子で四つになります。もう一人は

女の子でまだやと二つです。女の子の方はまだいい

のですが、四つになる男の子はとても手がかかります。

妻 そうでしょうともねえ。

男 男の子で四つなら一人前だよ。

妻 まさか。

女 私の年で子供が二人居るのは多いつて、みなさんお

つしやいます。でも、私はそうは思わないのです。

男 そうですとも、二人くらいは普通です。

妻 三人生まないと義務を果たしたことはないんです

すつてよ。

男 で、どうしました、その子たちは……？

女 いえ、それはいいのです。

男 はあ……。

妻 元気なんですか？

女 ええ、かなり……。

男 それは良かった。

妻 何よりですよ。子供達が元気ならね……。

女 それで、私、本を読みました……。

妻 本を……？ まあ……。

男 育児の本ですね？

女 いいえ、小説です。

男 ああ、いいですねえ。結婚して子供を生むと、もう

女の人は本なんか読みませんからね。とても小説なん

てね。

妻 いろんなことが書いてありました？

女 いろいろ……。

男 いろいろです。小説家と云うのはいろいろなことを

書きたがるものです。

女 その中で、マッチ売りのことが書いてありました……

……私、最初は何のことか分かりませんでした。もう

一度読みました。ちょっと変な気持でした。

男 ヘン？

女 ええ。それから、何度も読みました、くり返して……

……。

妻 何度くらい？

女 五回……もつと……。

男 それで……？